

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580046

研究課題名(和文)美術館ウェブコンテンツの公共的利用可能性

研究課題名(英文)Web-contents of museums as public and accessible resources

研究代表者

中川 真(NAKAGAWA, Shin)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40135637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：期待される成果は、学芸員トークをインターネット上で配信するキュレーターズTV(CTVと略)のコンテンツを増やし、美術館へのアクセシビリティを高める実践的部分と、この試みに対してアンケート調査を行い、その評価によってベターなものとするための提案を行う分析的部分の2つである。コンテンツ制作に関しては、収録は100件以上行い、そのうち65件を本研究期間中に新たにウェブサイトアップロードして、プラットフォームとしての充実をはかった。アンケート調査(417サンプル)の結果によれば、CTVを見て美術館に行ってみたいと思うようになった者が80%を超え、CTVの歴然とした効果を示す結果が見られた。

研究成果の概要(英文)：This research is expected to obtain two main results. The first one is that the curators TV (CTV), which delivers digital contents of curators' talk, raises accessibility to museums by increasing contents. The second one is that a survey (questionnaire) of a large number of people is conducted and web-contents are improved through its analysis. More than a hundred recordings were done and sixty-five contents were shown on the CTV web site so that CTV could be enriched as a unique platform of outreach activities in the museums. According to the results of questionnaire (417 samples), more than eighty percent of people, who saw CTV, had willing to visit museums, and this proves the effects of CTV.

研究分野：アーツマネジメント、サウンドスケープ、民族音楽学

キーワード：鑑賞教育学 美術館学 サービス科学 ギャラリートーク アウトリーチ アーツマネジメント 公共性

1. 研究開始当初の背景

申請時の前年に東北地方を中心とする東日本大震災が起こった。また、その前にはリーマンショックによる金融破綻に端を発する雇用問題の深刻化、さらにそれ以前の米国における9.11(その背景には新自由主義政策によるグローバルな経済格差の拡大)など、21世紀になってから我が国をはじめとする「先進諸国」では大きな社会問題が生じている。そういった状況に対して、文化芸術面からの解決や克服アプローチが社会包摂型アートマネジメントといった概念で提唱されてきている。その方法は貧困や紛争、被災地の現場において活動するものから、社会へのアクセシビリティを高める運動に至るまで、臨床性においては様々なレベルがあるが、多様な活動が活性化しているのは事実である。本研究は、その一端として、美術館へのアクセシビリティ向上、すなわち離島や病床など、アクセスが難しい人々に対して美術館がより近い存在になることを願って計画された。もちろん、そういった被排除傾向にある人々だけではなく、「一般の」市民の方々への提供も視野に入れたサービス研究であることはいうまでもない。

ライフイノベーションにとって芸術・文化が重要な役目を担うことは論じるまでもない。その具体的サービス提供で大きな役割を果たすことが期待されている美術館は、バブル期の箱物行政時代に急激に規模が拡大したものの、その後の長期の経済停滞下において、財政面で大きな縮小圧力がかかっている。それは美術館の「敷居」が高く、文化インフラとしての利活用が低調であることが大きい。申請者は芸術文化活動の社会への浸透に、実践・研究両面から取り組んできており、CTVはその重要な活動の一つである。美術館の魅力を社会にアピールすることをねらい、2010年度からギャラリートークの動画コンテンツの作成に取り組み、既に25本弱をウェブ上で公開している(<http://www.curatorstv.com/doc/project.html>)。

2011年に配信予定のコンテンツを48名に見せた上で予備的なアンケート調査を行ったところ、「CTVを見て楽しめましたか?」の項目で80%の人が楽しめたと答え、「CTVがインターネットで見れるようになるのを望みますか?」の項目で望むと答えた人が90%になっており、「CTVに教育コンテンツとしての価値は感じられますか?」の項目では感じると答えた人が93%と、非常にポジティブな結果が出ており、大きなニーズがあると考えられ、研究を後押ししている。

2. 研究の目的

本研究は、美術館における貴重な情報源のひとつである学芸員のギャラリートーク(作品解説)をインターネット上に配信し、そのインパクト等を分析しながら、一部の来館者のためだけではなく、多くの人々のアクセス

可能な公共性の高い文化資源へと転換させる方法を解明することを目的としている。既に申請者が設計したキュレーターズTV(CTVと略)というウェブサイトにおいて、2010年から社会実験的に配信を行っているが、アンケートやインタビューなどを通じた大量解析、ならびにそのフィードバックによるコンテンツの改良などは未達成であり、本研究によって実効性の高い成果を得ることをめざす。

本研究は、ギャラリートークという美術館に眠っている魅力的な素材を、多くの人々に知ってもらいたいという素朴な願いが出発点である。ウェブ配信を行い、最終的には何らかのビジネスに繋がる可能性もあるが、単に美術ファン拡大や収益追求ではなく、社会問題の解決とそれに続く新たな社会(コミュニティ)像の確立といった、より普遍化されたテーマに取り組みたいと思った。そこで考案したテーマが、地域に根ざした公共圏の生成を、サービス科学によって実現するというものである。21世紀に入ってから、社会の歪みは是正されるどころか、拡大の傾向にある。2008年のリーマンショックが顕在化させた社会格差、貧困の問題、また、我が国においては、東日本大震災という未曾有の災害に直面している現状がそれを示している。社会は様々な意味で立て直しを迫られており、旧に復することではなく、新たな社会を提示し実現するものでなければならない。それは、多様性が認められ、貧困などによる不利益が生じない社会、すなわち豊かな公共性が保証された社会の実現である。この公共性は、住民相互のアクセシビリティ(接近可能性)の高さによって確保されるが、本研究では、「キュレーターズTV」というプログラムをアクセシビリティを高めるメディアとして使い、それを(サービス)科学的な手法で効果や評価基準を担保しながら、社会における公共性の生成に貢献しようとするものであり、このような組織的な展開は世界に類例がない。将来は、国内のみならず、グローバルな展開を視野に入れている。

3. 研究の方法

研究活動内容は大別して、1)CTV制作、2)CTVの社会的評価、に2分される。1)CTV制作は、全国美術館会議加盟館をフィールドとして進める。2)社会的評価は、インターネット(CTV視聴者)をフィールドとして行う。本研究を進めるためには、新サービスである1)CTVの実践的作成・配信の構築が不可欠であり、その展開に連動する形で、サービスの提供—被提供を観察する立場である、2)社会的評価を実施する。CTV動画コンテンツは、全国の美術館に出張して撮影し、逐次、編集し、ウェブ公開していく。動画コンテンツ制作については、予算に依存しているため、本研究においては約100件のギャラリートーク収録を行い、そのうち65

件を視聴用としてウェブサイトアップした (<http://www.curatorstv.com>)。

アンケートは平成 27 年 2～3 月に行われ有効回答は 417 件であった。アンケート項目は回答者の属性(性別、年齢、職業等)のほか「これまでに CURATORS TV をご存知でしたか?」「これまでに CURATORS TV をご視聴されたことはありますか?」「日頃、美術館や展覧会などには行かれますか?」「アートに興味はありますか?」「CRATORS TV を見て楽しめましたか?」「映像は見やすかったですか?」「音声は聞きとりやすかったですか?」「他の展覧会のギャラリートークも見たいですか?」「CRATORS TV を見て美術館や展覧会などに行ってみたいと思いましたが?」「CRATORS TV を見てアートへの関心は高まりましたか?」「CRATORS TV を人に薦めたいと思いましたが?」「CRATORS TV でより多くのギャラリートークを見られるようになるのを望みますか?」「ギャラリートークの収集・保存に学術的価値は感じられますか?」「CRATORS TV に教育コンテンツとしての価値は感じられますか?」「CRATORS TV の配信によってアートへのアクセスバリエーション向上に繋がると感じますか?」「今後、ARTLOGUE の YouTube チャンネルで、アーティストやキュレーターなどのトークが視聴出来ることを望みますか?」「CURATORS TV の公開情報や、様々な方々のコラム、プレゼントなどを掲載しているメールマガジン「ARTLOGUE mag」(毎月 1 日配信)へのご登録はお済みでしょうか?」「CURATORS TV の公開情報など掲載している Twitter アカウントはご存知でしょうか?」「ARTLOGUE が運営する、世界中のパブリックアートをアーカイブするプロジェクト MoPA (Museum of Public Art) をご存知でしょうか?」「IT やテクノロジーを使った、アートの新しいサービスなどにご興味はありますか?」「ARTLOGUE のサービスはオープンソースプロジェクトです。ご興味はありますか?」という質問(回答時間約 5 分間)を行った。

4. 研究成果

CTV 制作については順調に進展し、コンテンツは目標の 100 件近く(94 件)となった。コンテンツとしては、奥脇嵩大「青森 EARTH2014」(青森県立美術館)、川西由里「美少女の美術史」(島根県立石見美術館)などが挙げられる。2)CTV の社会的評価についてはアンケート調査を実施した。また、CTV 以外の参加型サイトである世界中のパブリックアートを集合知でインターネット上にアーカイブするプロジェクト MoPA (Museum of Public Art)を追加的に同じウェブサイトで実施し、アクセス数の増加をはかってアンケート環境を整えた。アンケートはウェブ上でを行い、約 650 のアクセス数を見たが、有効回答は 417 であった。回答は学生、

主婦、会社員、自営業など万遍なく散らばったが、男女差(男 66%、女 34%)にやや偏りがみられた。これまで CTV を見たことがない人が 85%であり、アンケートを媒介として CTV に対する使用者(消費者)評価が比較的ストレートに行われたものと推測される。年間を通して美術館に行かない人 31%、半年に 1 回の人 12%、3 ヶ月に 1 回の人 11%という回答状況のなかで、CTV を見て美術館に行ってみたいと思うようになったのが「是非」が 52%、「どちらかといえば」が 31%というように、80%以上の回答者がポジティブな心理へと変わるなど、CTV の歴然とした効果を示す結果がいくつか見られた。また、見やすさなど、撮影・映像技術に関する問いも多く含んでいたため、今後の改良にも資することができそうである。

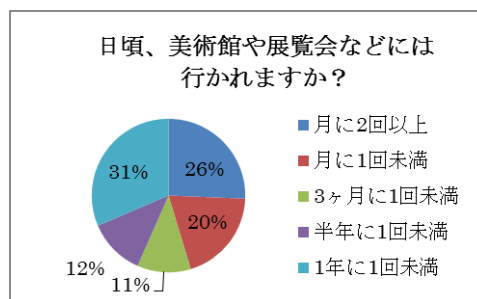


図1 日頃、美術館や展覧会などには行かれますか?

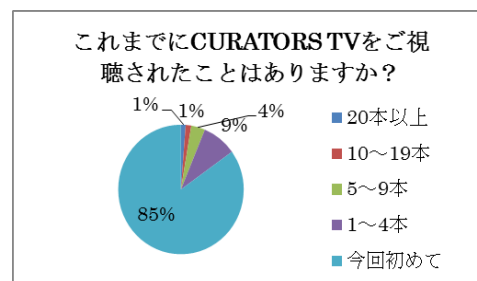


図2 これまでに CURATORS TV をご視聴されたことはありますか?

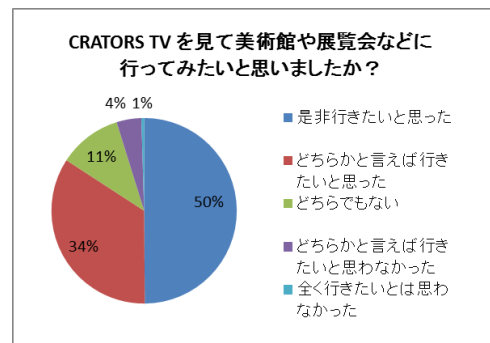


図3 CRATORS TV を見て美術館や展覧会などに行ってみたいと思いましたが?

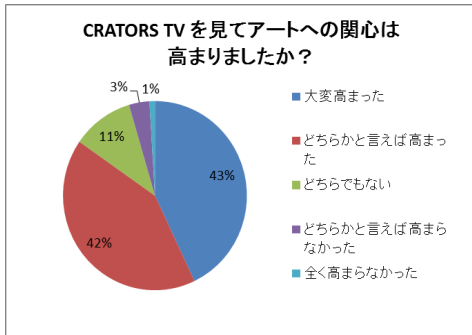


図4 CRATORS TV を見てアートへの関心は高まりましたか？

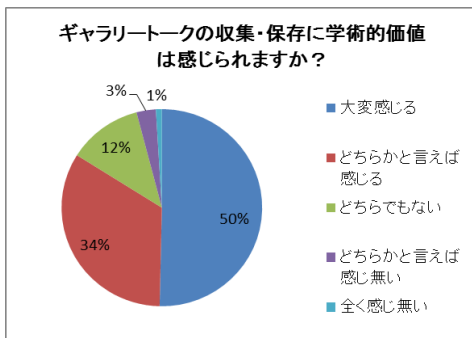


図5 ギャラリートークの収集・保存に学術的価値は感じられますか？

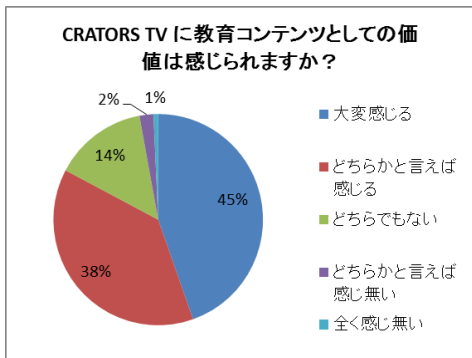


図6 CRATORS TV に教育コンテンツとしての価値は感じられますか？

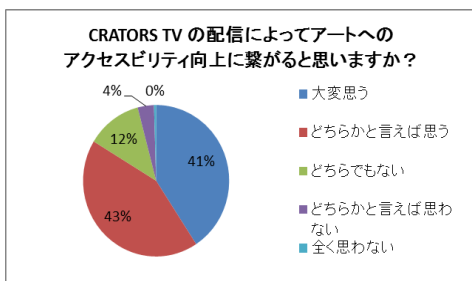


図7 CRATORS TV の配信によってアートへのアクセスビリティ向上に繋がると思いますか？

CTV のインパクトについてはアンケート結果からも明らかであるが、詳細なインパクト評価を今後行うことによって、より厳密な評価が下されることが期待される。本研究は実践研究であり、コンテンツ制作の部分にも多大なエネルギーを費やした。現時点では追走するウェブサイトはなく、オンリーワンの状態である。今後は、海外対応を視野に入れてグローバルなウェブサイトへと発展的に構築する予定である。サービス科学、社会包摂的観点からの位置づけについては、国際学会での口頭発表を行い、その論文の公開を近い将来に行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

NAKAGAWA Shin, Art as a Mechanism for Increasing Social Accessibility, Journal of Urban Culture Research, 査読有, vol.7, 2013, 43-50

中川真, 2013年度シンポジウム、サウンドスケープ、日本サウンドスケープ協会、特別監修、Vol.15-1, 2014: 2-18

中川真, 芸能の力、民族藝術、民族藝術学会、特別監修、第30巻、2014、8-24

中川真, 都市防災のための地域劇団創生プロセス、都市防災研究論文集、査読有、第1号、2014、43-49

〔学会発表〕(計14件)

NAKAGAWA Shin, The Role of Universities against Neoliberalism, 2015年3月5日、Gadjah Mada University (Yogyakarta, Indonesia)

NAKAGAWA Shin, Listening to the Unheard Voices, The 13th Urban Culture Research Forum, 2015年3月2-3日、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)

NAKAGAWA Shin, Critical Issues of Asian Arts Management, The 9th International Conference of Asian Arts Management, 2014年12月17日、Multimedia University (Kuala Lumpur, Malaysia)

NAKAGAWA Shin, Introduction to Socially Inclusive Arts Management, The 9th International Conference of Asian Arts Management, 2014年12月16日、MAP Publika (Kuala Lumpur, Malaysia)

中川 真 (NAKAGAWA Shin)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40135637

NAKAGAWA Shin、Locating arts carefully— Mechanism for increasing social accessibility —、The 2nd International Conference for Asia Pacific Arts Studies、2014年10月31日、Institut Seni Indonesia (Yogyakarta, Indonesia)

中川真、音景/サウンドスケープ、釜ヶ崎芸術大学、2014年10月27日、太子会館老人憩の家(大阪府大阪市)

中川真、アートと社会的包摂、そしてアジア、文化庁大学活用事業、2014年9月17日、船場アートカフェ(大阪府大阪市)

中川真、今、そこにある危機 - 我々はどのり越える?、2014年5月21日、大阪市大文化交流センター講座(大阪府大阪市)

中川真、社会実験としての神楽宿、日本音楽学会東日本支部第21回定例研究会、2014年3月22日、岩手大学(岩手県盛岡市)

NAKAGAWA Shin、Arts and Social Outreach、The 12th Urban Culture Research Forum、2014年3月4日、Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand)

NAKAGAWA Shin、Toward the Sharing of Asian-Style Arts Management、The 1st International Conference for Asia Pacific Arts Studies、2013年11月12日、Institut Seni Indonesia (Yogyakarta, Indonesia)

中川真、世界の表現活動・市民活動とつながる結節点、全国アート NPO フォーラム in 神戸、2013年11月9日、ArtTheater dB KOBE(兵庫県神戸市)

中川真、大阪のサウンドスケープ、なみはや大学講義、2013年7月6日、住吉コミュニティ会館(大阪府大阪市)

中川真、東北の伝統文化と現状、民族芸術学会第29回大会、2013年4月27日、群馬女子大学(群馬県佐波郡)

〔図書〕(計1件)

中川真、和泉書院、アートの力、2014、203

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.curatorstv.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者